

戦争と子ども

山崎光 絵、山崎佳代子 文(西田書店・1944円)

一冊の本が作られるまでにはさまざまな経緯があり得るが、この本ほど劇的なものは珍しい。

三十年以上前にセルビア(当時はユーゴスラビアの一部)に渡って結婚した詩人がいた。やがて生まれた子供たちの血の四分の三は日本人、四分の一はセルビア人。

ユーゴスラビアはまことに複雑な国だった。チトーという稀な指導者のもとで統一を保ったが、「七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国家」と呼ばれた複雑な国はしかし一九八〇年にチトーが亡くなると結束が緩んで分裂し始めた。

内戦が続き、一九九九年にセルビアは七十八日間に亘ってNATOの爆撃を受けた。

その時、詩人の子供の一人は十二歳で、学校の授業もない不穏な空気のなかでひたすら絵を描いた。空襲が終わった時、この光という子は絵を

捨てると言ったが、母親はそれを二十円で買い上げ「赤いファイル」に入れて保管した。

その後十年に亘って母親は内戦による難民を支援する活動をしていった。郷里を追われた人々を助けながらいくつもの受難の話を聞き、それを記憶に留めた。

生きる意味追求 無意識の領域揺さぶる

記憶はやがて文章化され、それと子供の絵を合わせて本にするという企画が生まれた。その成果がこの本である。

まず絵に驚く。奔放で、奇怪で、不安に満ちていて、それなのに何か温かいものが脈々と流れている。ストーリーがあるように見えながら、見え隠れするそれは決して一つに繋がることはない。書かれなかった物語の挿絵のよう。

彼自身が十五年後にこう書いてい

る。「この絵の中では、何か重要なことが起っている筈曲気がする。まだ何なのかわからないけど、重要だということだけはわかっている。ずっと秘密にしていた、何か大きなことが、見つかってしまう瞬間を目前にするように。あるいは、新しいものの秩序が、公表され実行されていく瞬間のように。とにかく、それは、これからは全てがすっかり変わってしまった、と後に言える瞬間」

なぜこの一群の絵に母親である詩人は難民たちの話を添えようとしたのだろう。

これらの話は奇怪ではない代わりに悲惨で、不安に満ちていて、それなのに何か温かいものがある。つまり絵と同じ素材でできている。二つは互いに助け合って一冊の本を成している。コラボレーションが最もうまくいった例。

最初に置かれたのが「デサンカ・マキシモビッチ小学校の子供たち(フリエドル市)」「の虹のお家」という詩である。

虹のお家は美しいけど
その心は悲しかった

そこから子供たちが
ひとり残らず
追い出されたのだもの

一九九五年の夏、クロアチアから二十二万人のセルビア系住民が追い出されて難民になった。部外者である我々はその惨状を想像しようとする力しなければならぬ。敢えて言えば、この世界には部外者というものは無いのだから。すべての人は繋がっているのだから。

セルビア側のある町で、一人の主婦がたぐさんの人が逃げて来るのを茫然と見ていた時、娘が怒って言った。「おかあさん、何をしているの。ただ、悲しんでいるだけじゃだめよ。何かをしなくちゃ。お鍋にいっぱいお豆を煮て、体育館に持っていくだけだ、何かしたことになるのよ」

この子もまた十二歳だった。これをきっかけに彼女たちは一人のお婆さんを家に引き取り、その人

の娘さんと連絡が取れるまで九日の間、一緒に暮らした。

お婆さんが娘さんのもとへ旅立つ前の晩、近所の人たちが集まってファッションショーを開いた。みんなでスーツやコートやスカートを持ち寄ってお婆さんに着せ、身体に合わせて裾を上げ袖丈を直して、旅行鞆に詰めた。翌日、バスの切符を買って、乗せて、娘さんのもとへ送り出した。

このお婆さんの名はマール・ムルジェノウィッチ。ちゃんと記憶され、伝えられ、この本の中に記されたこの名が美しい。人に名前があることの意味がわかる。

絵について言い足りない。絵は引用できないから。それならば描いた本人の言葉を引こう。「透明の翼をもつ人が、高台の上に立って、彼の影が高台からはみ出て鳥になる。高台の反対側には、扉があって、それは女の身体である。その扉は開いていて、その中には、小さな猫がいる。話は絵よりも不思議」

我々は知らぬ顔をしているが、内戦と難民は過去のものではない。シリヤに見るとおり現在の問題、未来の問題である。そして子供もその渦の中にあるのだ。

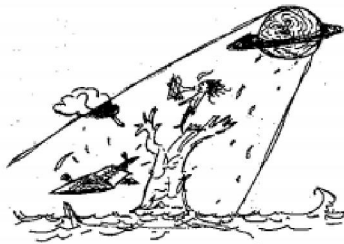
戦争と子ども

山崎佳代子、山崎光著

西田書店 1800円

評・若松 英輔 (批評家)

何と透明な、そして強靱な本だろう。この本には、作者たちが、爆撃下のベオグラードの街で、また各地の難民センターで耳にした市井の人々の告白がつつられている。確かに書いたのは作者だが、「作者の」言葉は記されていない。第二次世界大戦中ナチスの強制収容所で暮らした人、爆撃で、家を、故郷を、大切な人を失った者たち、定住することができず旅のなかで生涯を送り「難民」と呼ばれることになった人々、そうした人の内心の思いが、虚飾のない、語られたときの奥深い響きを備えたまま、美しい日本語で刻まれている。例えば次のような一節。



非戦を願う深い言葉

◇やまさき・かよこ＝1956年生まれ。静岡で育ち、ベオグラード在住。
◇やまさき・ひかる＝86年、ベオグラード生まれ。絵は本書より。

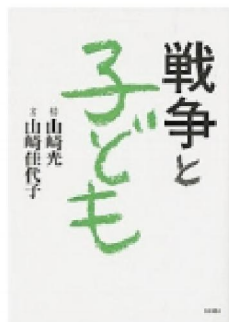
「子どもが 泣いている／泣いているのは／おなかが すいているからじゃない／おなかがすいて／な／のは ちいさな あかちゃんだけ／／／／／」
ただ、本書の「言葉」とは、必ずしも文字の姿をしていない。それはまず絵であり、色でもある。絵を描いた山崎光は、「この本のなかの一枚の絵を、言葉にしてみてくださ」と記している。同じことは、この本に刻まれた文字にもいえる。二人の作者は、自分たちが自ら伝え聞いた事実には、文字でも絵によっても表し得ない真実が潜んでいることを知っている。平和を切望する多くの人に、この本を手にとって欲しい。そして、一度ではなく二度、三度と折にふれ、文字を読み、絵と対話していただきたい。この本を貫くのは反戦の主張であるより非戦の悲願である。戦争に反対するのではなく、戦いと自体を無化するような切実な祈りがこめられている。

読め、そして、言葉にならなかった人々の折りを胸によみがえらせよう。そして、静かな声が聞こえてくる。そして、一冊を読み、心から心も揺たさず、平和を祈る心で読むのである。

平成 27 年 11 月 1 日 読売新聞



★「戦争と子ども」(山崎佳代子・文、山崎光・絵) 静岡市出身でセルビア在住の詩人である著者は、1990年代の旧ユーゴスラビア紛争時も家族と共に現地に残った。本書は、故郷を追われ難民となった子どもたちへ聞き取りを続けた10年間の诗情あふれる記録だ。
99年の北大西洋条約機構(NATO)空爆の最中、当時12歳の三男が描きためたペン画を添えた。地面が



ら手が伸び、空からは巨大な目が見つめる。描かれた女性は一様に無表情。線の強さが際立つが、物悲しい。
2008年にセルビアからの独立を宣言したコソボの子どもは「旅はおもい 旅はきらい」と言い、第二次世界大戦中に「子ども絶滅収容所」を生き抜いた隣人の記憶も織り交ざる。悲しみ、苦しみが時代を超えて繰り返される、戦争の恐怖と愚かさをより鮮明に伝えている。

(西田書店・1944円)

平成 27 年 10 月 29 日 静岡新聞